WASON
HQ
1104
J74+

遞信省認可
明治二十年五月廿一日刊行

女學雜誌

每土曜日發兌
一冊正價五錢
府內無郵送稅

第六十五號

東京　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Women's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 65. MAY 21ST, 1887.

第六十五號

EDITORIAL:—Adultery of the Nation.

LEADING ARTICLES:—Hygine and Physical Culture, by Dr. Kersy; Woman's Life in a Civilized Society, by Mrs. T. Sasaki; Woman's Complaint, by Mrs. T. Nakashima (Concluded).

BIOGRAPHIES:— Miss Fuji (Concluded).

GENERAL NEWS.

ADVERTISEMENTS.

SUPPLEMENT:—The Prize Essays on "Japanese Women's Property."

●社說　姦淫の空氣

●論說　醫學博士ケルセー孃演說（健全及躰育）筆記○婦人文明の働（佐々木豊壽子述）○婦人歎（中島俊子）

●叢話　和文學講義第三（鈴木弘恭君述）

●佳傳　忠貞不二秘錄（五）

●新報　二十件　●廣告

●第四回懸取文始末附錄の七

●珊瑚の珠　（第三十二回）

○シエクスピヤ曰く女をして高慢ならしむる者は即ち其美なり女をして尊らしむるものは即ち其德なり又女をして神の如くならしむるものは即ち其程好きとなり

○ポープ曰く吾等男子には數多の情念ありと雖も女流には只だ二箇の情ありと云ふべし即はち娛樂を愛する事及び權勢を愛する事是れ也

○ザッケレー曰く天の使の如き淸潔なる女子の足下には吾等男子の粗暴なるもの謹んで平伏謙遜し斯る高尙なる德ある の人が決して不善を爲すとなかるべきとぞ警服するなり

○想夫戀といふ樂は女をとこをこふる故の名にはあらずもとは相府蓮文字のかよへるなり晉の王儉大臣として家にはちすをうゑて愛せしときの樂なり是より大臣を蓮府と云ふなり（兼好法師徒然草）

○髮長くして色白く形こまやかにして媚多し楊貴妃が花の眼李夫人が蓮の瞼、夏野の荻の風になびく有樣、翠の山に月の出るよそおひなり綝袖と花のそで翻りて彩雲の翠嶺を廻るが如く絢袖とぬいものゝたもとひらめきて碧浪の蒼濱にたゝめるに似たり（源平盛衰記）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第六十五號

明治二十年
五月廿一日

●社說

○姦淫の空氣

春花既に去て綠葉蒼々たり氣朗に候暖にして居るに安し乍ち見る六月の天日々に陰り來て雨小止なくそぼ降るときは四面たゞ欝陶として心躰共に不快なり之をさみだれの季節と爲す此際何の處も濕り渡りて万物悉く綏るむ天地家内皆な是れ惰慢、不快、憂欝の空氣を以て被はるゝものなり吾人今ま吾日本國内現時の有樣を考ふるに恰も是れ道德世界の六月なり

近來驚くべき風說を道路に傳ふる者あり吾人一度び之を聞き耳を塞で信ぜず之を再びして目を閉ちて顧みず三たび之を聞くに及んで奮然一言せざるを得ざるものあり思に其言は齊東野人の說あり云く、某所の宴會に某、某侯の妻に迫りて之を追ふと或は云く此時女遂に害せらる某之が爲に其夫に金を贈りて購を爲すと、其事素と上流紳士の間にあられまじき者なり。吾人は十中の五六如此き姦惡の實際に在る可らざるを信じ敢て之を疑はず故に輕々に此風說を暴信して所云る霧中に敵を討つの兒戲を爲さずと雖も但だ吾日本國の輿論は實に如此き風說を生ぜしむるものあるを見又此風說を語つて恬として憂ひざるものあるを見ては之を筆誅するに於て毫も容す所あるを得ざるなり

初め吾人が一度び之を聞て耳を塞ぐや人啞然として笑て曰く君等驚くを休めよ交際社會に此類の事あるは固と珍事にあらず某の妻すでに某に通じて異子を擧たるは君未だ聞かざる歟某の令閨夙に臭聞ありて近來遂に離緣せらるゝも亦君等の未だ聞かざる所歟と更に得意の容を爲して言はんとす吾人慄として戰栗し瞑して見ず其人更に大言して云く君等之を忍ばざる歟聞くべし近來花風病しきりに流行して娘孃多く窓下に苦吟す唐人が所云る風流の事今多く交際社會にあり君等須らく氣を大にして敢て之を羨めと吾人一擊して之を去らせ慷慨止まず出でゝ之を知人に訴ふ知人亦笑て慰めて云く君等何すれぞ如此なる抑も此類の事は世人之を知り新聞之を報じて既に陳し世人と新聞との未だ知らざる所のものを聞かば君等羞し驚き死せんと吾人茲に至て日本國内姦淫の空氣の充滿したるを知る也

交際社會の人即ち上流紳士貴婦人諸君の面々は實際果して如此き風說を惹起するに足るの元因ありや否や之れ固より國を

要ふるもの丶掛念して止まざる所あり然れども吾人が先づ尤も痛歎して措かざる所のものは則ち此事の有無にあらずして世上一般の輿論の墜落したるに在り吾人は些々たる一私人が動物の慾を恣にして徳義上の罪を侵したるや否やを穿鑿するの餘暇なく先づ滔々たる日本國民が將に姦淫の慾海に溺れんとするを見て大呼して之を止めざるを得ざる也世人は記臆すらん前年倫敦の市中に密賣淫の熾んなることを痛論したるものあり又同時合衆國大統領が元と姦淫の罪を侵したることを切議したるものあり其奇異なる論議は遂に數多の證跡に伴れて天下人の信する所となれり思ふに歐米文明の地文明の人にして既に此事なきを保せずと云はゞ万事不整頓なる吾日本國内に於て万事に失策多き吾日本國民の中に立ち其少さか上流に位するが爲に敢て此類の事なしと云ふを得んや齊東野人の言必しも乍ちにして之を無みす可らざる也然れども倫敦に密賣淫あるときは英民悉く立て之を責めて容す所なし大統領の候補に少時の失德あれば米人亦一齊に論難して之を聽かずこれ則ち輿論の良心不善を惡むことを知るが故なり思に如此して社會の道德庶幾くは遂に清潔の地に至るべき歟而して吾國現時の輿論果して何如んと云はゞ人々奇怪の風說を傳唱して相ひ奇まず之を一席の追從世辭と爲して恬として顧みず甚しきは償ひ金の不足を責め豪遊の盛んなるを羨みて其身が謂ふ所の社會に在らざるを怨むものあるに至ては吾國内の道德の歐米に及ばざる幾十等なるを知るに足るべし苟くも國を愛するものは先づ之を歎ぜずして可ならん哉

抑も姦淫は罪惡中の尤も裝ひたるもの也此罪を侵すものは當時多少の愛念を有し共に罪を侵す所の人を見て多少の慈惠心を發することあり此を以て人或は之を盜賊殺害のたゞ人を害して己を愛するが如きものに比せず爲に之を惡むの情時として之に減ずるものあり世の未だ開けざるに當ては或は之を以て風流の事とし或は之を以て一生の至樂とするものあるなり然れ共苟くも眞正の宗敎を知り人間の權利を重んじ社會の道德を掛念し一般の安寧を希ふものは之を惡むこと猶ほ蛇蝎の如し之れあるの以上道義と幸福との必ず行はるべからざることを信ずるもの也故に國に就て之を云はゞ姦淫を惡むの多少は以て其國の文野をトすべし人に於て之を云はゞ姦淫を惡むの厚薄は以て其人の品格を證そべき也今ま道義上にこの罪を罰するの所以を言はず只だ其罪の爲に社會に害惡を來らするの一斑を叙すれば人の精神は之が爲に鈍ぶり人の躰は之が爲に衰へ

一家の幸福は之が爲に滅して一國の生氣隨て滅じ子孫の出生健全を得ずして國民の生力隨て弱く人權を重ずるの念乏くして一國の自由爲に伸びず故に姦淫の空氣濃厚なるの地には海防の軍艦柵壁敢て効なし調練に熟達したる陸上の軍兵將卒敢て力なし人權の伸張上下の和樂亦到底望むべからざる也特に吾等が敬愛する姉妹の地位を進めて之を卑屈なる玩弄物たるの境界より遠からしむるが爲には先づ社會よりこの罪を滅せずんば則ち得ざる者あり之を以て一國が姦淫の空氣を以て滿るは恰も是れ衰廢の氣を以て濕るものと云ふべし上下の綱茲に緩るみ國家の德茲に腐り全社會を擧て悉く鬱々濛々の中に沒するもの也

吾人は吾が愛する日本國内に姦淫の空氣充ち滿ちたるを歎じて先づ尤も之を慷慨するものあり敢て路上の風說を信じて其謂ふ所の人に堂々の言を與ふるものにあらず何んとなれば些々たる私人が行ふ處の姦淫の罪は吾人をして日本全國の姦淫を歎ぜしむるの慷慨に及ばず又況んや其罪の實否甚だ明ならず之を穿鑿するの餘暇吾に存せざるが故なり然れども此際上流の紳士貴婦人即ち舞踏に西洋の開化を倣ひ宴會に文明の摸樣を寫さるゝ交際社會の人々に一言すべきものあり公等の目と耳とよく此姦淫の空氣を見聞し公等が心中の道念亦よく之を歎ずる乎公等之よりしてその一言一行に淸潔の德を示して此姦惡なる社會を淸くするとに盡力あるべし斯の如くして人誰か公等に今の風說に類するものあるを信ぜん三尺の童子もよく公等を信じて公等の爲に代言人となるべし公等上流に立つの人決して此の如く盡力するの義務なしと云ふを得ざるべき也。特に吾等は其貴婦人諸君に望む世上の姉妹中には娼妾を全廢し藝妓を遠ざけ一夫一婦の制を主張し晝夜女權伸張の方途を圖るものあり又戰時は身を挺して負傷者の爲に看護し平常は病人を慰め貧者を助け子弟を教育して以て世人を安からしめんとするものあり此類の姉妹は果して諸君の友か敵か吾人女學雜誌の記者は敢て一言の答を要するの權あり

● 論說

○第二回女學演說第一席筆記

醫學博士ケルセー孃演述(健全及躰育)の二

私共は是より入湯の事に就てお斷致しまう、入湯は食物を食して直に致ては宜くありません、入湯後二時間を經て食事するが至極よろしいけれども、食後直に這入ならば大に私共

の消化を妨げます、又激しき運動を爲したる后直ちに致すも宜しくありません、何ぜならば私共の蒸發氣を消し盡す故で御座ります、稀れに入湯する者でなくば一日に一度位づゝハ宜しいと考ます。

私共は是より隨分大切なる着物の事に就て申しませう、日本のお方が追々西洋の衣服を着けるに當て、其道具の中に害のあることをお斷し申すも一の必用と思ひます。

皆樣方も御承知の通り「コーセット」と云ふて腰より下に着る物で、腰骨の邊に色々の着物を着けるのですが、腰の所に餘り重みを着けぬが宜しい、若しも之を着ける時は色々の病を生じます。

西洋にてはコーセットを大切の道具と致しますが、私は二ツの害を爲す者と思ひます。

私は初めに壓搾と云ふ言葉を使わうと思ひます、何ぜならばコーセットはおなかを壓搾なければ無用として廢されて仕舞ます、是は私共の胃や又心臟や我々のおなかにある所の器械を害します。

總て腹中にある所の機械ハ隨分強く働きますから從て隨分強くなければ爲りませぬ、若し此肺が強く壓されますならば血を清める所の氣を能く吸ふとは出來ません、此結果は必ず肺病で御座います、其初めの結果は食物の消化を鈍くし又血を少なからしむるに至ります、斯の如き時は私共は必ず足が冷へるとか腰が冷るとか云ふ樣に至ります。

第二は勞症で御座います、コーセットを爲す時は、胸のあたりに小さなる腫物が出きますが、コーセットをする爲に下の方にも出きます、又胃が收縮せられまして胃の働を止めます故に、食た物が胃液と合する事が出きません。

又おなかの機械をして其位置より外に追出す事があります縱令ばおなかの機械をして下腹に押付け下腹の者を腰のあたりに押出しますから、冥々の間に恐るべく悲しむべき病を生ずる事があります。

(甲圖畵右方ノ婦人ヲ指シ)此地等にある所の畵はコーセットを爲すに付て天然の位置を損し器械の下りし所を畵きしなり

(甲圖畵左方ノ婦人ヲ指シ)是れは自然の容にして(一々胎内ヲ指示シ)此所に心臟がありまして此所は肺で此邊に胃があるので御座ります、此所に膈膜があり息を爲す所があります、然してコーセットを爲すと否とに就て、斯の如き現象を呈する者であります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

支那人は足を小さくするの風がありますが、私共は自然の理法に戻る者と存じます、丁度五歳位の小供の足の樣です、然し私共は支那婦人の事を餘りいろ〳〵言ふヿハ出きませぬ私共のおなかも斯く小さく致しますならば實に悲しむべき事で御座ります。

元來おなかでも腰骨でも一定のきまりハある者です、此拇指を二倍にせし者が手首の廻りで之を二倍にせし者が頸で御座います、頸の廻りを二倍にせし者がおなかとなる順序ハ固より爭ふべからざるヿであります、故にコーセットをなしおなかを害するヿハ豫め知らねばならぬヿですから尙一層進で申しませう。

私共の息をなすに最も大切なる者は(甲圖ノ躰中ヲ指シ)此所にある膈膜で御座いますコーセットが此器械を壓ますから之を害のみならず此を療治する爲に大に身躰を傷めます。

(乙圖ヲ指シ)是はコーセットを爲せし人の圖で御座いまして御覽の通り(腹部ト胸部トヲ指示シ)此とこゝとの平均を失して居ります。

是にありまするは(卓上ノ偶像ヲ指シ)希臘と羅馬より參りし者にて、是ハ偶像であります、此羅馬と希臘との名は餘程秀でたる者で世の中では一番名高き者で御座ります。

此眞中にあるは希臘の神であります、これは永き間無くなつて居りましたを探し出たる者で勿論偶像でありますから私共は尊びて持て參りしのではありません、此形の宜しきために持參したので、何しろ古代の像ですから氣を附けて見るヿハ私共の利益となるヿと存じます。

又是ハ「キヂニクメートル」と云ふ者で御座います是等の者は「クリケットローマン」の像でありまして「セントペートル」に放たれたる者ですが、身躰の能く平均して居るのを見るヿが出來るでありませう。

是ハ女王のウイクトリヤと姬のビヤトリスの寫眞です、此人の容貌を御覽なさいあなた方は此人の眞の身躰を視るヿハ出きずとも此寫眞に由てコーセットを爲さゝりし人たるを知るヿが出きませう。

又此肩のイカリますハ、コーセットをして息をなすに苦しむ故に從て肩が張るのであります。

私共は此邦の婦人方が洋服を着くるとき隨分コーセットの爲めに苦んで勉强なさるお方もあらうかと思ひます。

私共は又アナタ方に夜る遲くまで蹈舞などをして遊ぶお方

があらふかとも存じます、若し斯様に致せば誠に生涯を短かくして仕舞、一己人に害のあるばかりでなく社會の人民をして衰へせしむるに至るべしと存じます。

此日本の御婦人方よアナタ方が此邦を愛し、知りつゝ却て此悲むべき地に陥らざる様に注意するとを望みます、アナタ方が外國の風を愛し之を適用するに當ては其可なる者は採り、不可なる者を斥るに注意あらんとを望みます。

西洋に於ては私共が改革を爲さゞるべからざるの地に至り、現に是れが行はれます、其は腰の圍りにある所の重き者を取除け其代りに宜じき者を着けるのです、私は今茲に改革された所の衣服を持て參りましたからアナタ方の御覧に入れませう(衣服一襲ヲ出シ之ヲ指示ス)此れは下に着ける所の者上に着ける所の者一處にして腰部の重き者を除却したるので御座います、之を着けますれば大に健康にも宜しく、着るにも大層都合が宜しう御座ります。

又足袋をとめる所に此ゴムがありますが、是れは宜しくない血の順環を止めます、此服に致せば其邊の都合は大に宜しう御座ります。

扨又靴の異に小さき靴を用ゐるは宜くないマメと云ふ者が出きます、爪先の尖りたる靴を用ゐれば指の上に指を重ぬる様になるから遂には不具に至ります、(靴ヲ出シ指シナガラ)此靴は御覧の如く先も狹くなく中も柔かにして至極宜しき様に私共は存じます、又健康にもよろしい。

私は此所に於て倘總ての事をお斷申したく存じますが時間がありませんから茲に止めます誠に詰らぬ事でアナタ方のお耳を拜借致し却て恐縮致します。(完)

○第二回女學演説第二席筆記

婦人文明の働

佐々木豐壽子述　佃龍雄筆記

今小兒がおいしい物を貰へば嬉しさのまゝ右の手に取り又左の手に移し人に向てみせびらかして居る中に礙と地上に落しましたら之を喰る事は出來ますまい、殆ど此と同じで私の今日演べまする婦人文明の働てふ問題は餘り旨すぎるので御座いますから、定めし嬉しさの儘に其主意を述べおとすやも計り難いとて御座ります。

私は獨り竊に思ひます、日本の婦人は勞力の働きで文明の働きてはありません、勞力に至ては随分大なる働を致します、今中等以下の働を申しませうならば、臺所の働、洗濯もすれば水も酌み、小供を背負ふとか、或は亭主の出入に世話を爲とか、

隨分勞力は致ます、又婦人の生計となす所は、女髪結とか洗濯とか農作とか賃機とか勞力の働き方も隨分ありますが、是れでは詰り自活の途を立るとは覺束ないと存じます、只養蠶を業と爲すに至ては先づ大なる働と申さなければなりますまい、何ぜならば生糸は日本第一の國産品で御座ます、又製茶も一國の全躰に關する者で一己人の利害は一國人の利害となりますから、日本の婦人事業の中では較大なる者と思ひます。畢竟文明の働とは前と違ひ知識の働きで御座います、諸君も疾くより御存じにはあるべけれど歐米婦人の爲す所を少〻れ噺致しませう現に只今演述なされたる「ケルセー」嬢は米國醫學博士だとの事で御座います、勿論彼國には電信の技術や新聞記者職工敎育家なぞをば皆以て婦人の働と致します、且つ其藝能の活潑と熟練とに依り其歳入を問へば隨分男子の右に出で然して生計を立て居ります、其他に大事業と名の付く者は基督敎の禁酒會で御座ります此等の者を以て文明の働なりと私ハ申さうと思ひます。

斯樣に申せば日本の御婦人方は申さるゝでありませう、日本には既に女子の師範學校もあり、玆より卒業したる者もある、職業學校もあれば高等女學校もある、箇樣に六ケ敷く論ぞるにも及ぶまじと難ぜらるゝお方もありませうが、其方々は今如何なる事をなされて日本の爲めに盡されますか、第一此疑が私には晴れません、又隨分立派に西洋の服を纒ひ西洋の言語を解せらるゝお方もありませうが、既に前の辨士の仰せらるゝ通り眞の利益と文明は未だ我日本に輸入し來らざる事と私は信じます、西洋の服も宜しい又私も改革は好みますが、大枚の金を費して外國の者を無理算段するには及ぶまいと思ふ。此外にも耳に聞き目に見るとも澤山あります彼の踏舞なぞが大分に日本にも流行しますが、西洋にても心ある人は夙に此を苦慮せらるゝ由なれば婦人快樂とすべき者は夜會に出て舞蹈をせずとも外に樂とすべき事がありませう、此の如きとを以て無上の快樂となす者は必ず立派の服を着ねば人に笑はるゝ抔と、殆ど外貌のみを文明と氣取り其眞を失ふ者が澤山にあると思ふが、あなた方は如何に思召されますか。

其外今の大學校の建てある所はあなた方も御承知の通り本鄕の四丁目で御座りませう、其近邊は如何なる者がありますか、言ふ迄もなく三四町にして根津となん呼べる一の遊廓が御座います、丁度根津と大學校とはお隣りです、又京城の周圍は如何ですか、數へて御覽じろ、吉原品川板橋新宿と至る所妓樓遊廓あらざるはなしと申すも癖言ではありますまい、然らば其

中心は如何に、新橋日本橋柳橋等渾て藝妓を以て堅めてあります、此の如くにして世の中は開化せり日本は文明となれりと申したいが、申すとは出來ませぬ。

其外に、尙一層私共の耻かしき事があります、曩に私は生糸の輸出を述べましたが、其生糸の足りぬ爲めか、淫を鬻ぐ賣女となん謂へる者を輸出します、新聞上にても御承知なるべけれど何處如何なる港に至ても日本人の賣女は一番に多のです、此一事にて西洋の辱を受ぬか受くるか篤と考て御覽遊ばせ。

して又私共の熱心に辨ぜねばならぬ事は、妾を廢するの一事であります、斯く云はゞ餘り亂暴の斷と思召さんが、世の開化となり文明と爲るに連れ、斯る卑しき者の我々と肩を比べ同じく日本の同胞姉妹抔と云はるゝハ、實に我々に取りての不幸此上なき事です、斯かる者あればこそ私共の品位は昇る事も進む事も出來ぬので御座います。

是を思ひ彼を考ふれば、實に私は悲しくなります、故に當て同志の者と計り婦人矯風者なる者を設けて此等三つの者を除くとに盡力致します、あなた方も若し御同感あらば何ハ措き共に一致して力を戮せられんとを冀ひます。

亞米利加にては前申す通り禁酒會なる者が大層の力を有して居りまして、會員は約二十萬人も在るとの事です昨年レビット夫人が世界漫遊の爲めに日本に參り、演舌もされたる事なれば其時の摸樣もあなた方は御存じの筈で御座いますが、何んと大なる事業ではありませんか、我々も禁酒の事に着手するは日本の必要とは存じますが、元來亞米利加英吉利抔にては淫賣者の無きにしもあらねど日本の如く公然と設けあるにあらねば詰り禁酒を主とするなれども、我國に取りてハ寧ろ矯風會の必要あるを感じます、最も今日は矯風會の演舌ではなく只序ゆへ申すのみの事です。

或は私の說を聞てお嗤ひになるお方のあるやも計れざれど、私共は神の祐を得て此三の者を廢し以て婦人文明の働きを爲さんと心懸る者です、何卒御同感のお方は早速にも御入會あつて共に日本の同胞姉妹をお愛し下さる樣に祈ります（畢）

〇婦人歎（其二）

中島俊子

余が今姉妹に說かんと欲する處のもの一にして止まらず然れども其中尤も望ましきものを說ん余が今尤も望む處のものを實行し玉ふに非れば到底婦人の地位を高むる能はざるなりと信ず然れ共余獨り余の說を信ずるのみにして或ハ大に過まちたる且害あるの說なるやも圖る可からざれば取捨ば姉妹の意

に委ぬるのみならず若之を非とし玉ふの姉妹あらば請ふ之が教を垂れよ

余が愛するの姉妹よ今日迄姉妹が男子より賤まれ侮らるゝの原因ハ何に依るや皆云ふ智識乏しき爲めなり學問無きの爲めなり經驗少きの爲めなりと或ハ然らん然れども猶之より甚しきものあり姉妹は單に怨み多くして怒少き是れなり姉妹が雙袖面を掩ふて一隅に隱然として怨みを說き玉ふも公然怒りを帶て正理を論じ玉ふと少し余苟くも姉妹をして怒内に生じて色外に發するを望むには非ず姉妹が溫和柔順人を感化するの德を養成し玉ハんとは希望に堪へず然れども若人あり姉妹に對して或は不敬の言あるか無禮の行あるに於ても姉妹は倘莞爾として嬌然愛を呈して之に待遇し玉ふ處の溫和柔順は余の尤も忌み嫌ふ處なり一言を以て之を說かば溫和柔順中に氣節を帶び玉はんことを願ふなり今日姉妹が地位を高尙にせんには此の氣節ありて男子をして決して不敬の言無禮の行なからしむるに至らずんば到底望む能はざるなり今日世に喋々する婦人論も必竟男子の一弄翫に過ぎざるに至らん

姉妹よ今日男女が交際を見て姉妹は男子が女子を尊敬するの意ありて交ると想ひ玉ふか若し男子にして女子を尊敬するの意ありとせば縱然男子と男子と相語るにもせよ坐間女子のあるを知て一言半句も猥褻の談話を爲さゞるべきに左はなくて女子が坐間にあるときは却て氣苦勞なしとて種々の談話に及べり是れ女子を侮る男子の罪とせんか否男子に侮らるゝ女子の罪ありと云はざるを得ず若し男子が苟くも猥褻の談ありし時女子之が不敬を怒り之が無禮を快しとせざる時は如何なる男子も之を耻之を侮ざるものあらんや然るに今日女子の中には之を怒らず之を責めず却て喜ぶものゝ如く此の無禮の男子を優待するあり是を以て男子の中にも女子と交るには極て猥褻の談話を爲さゞれば女子が歡心を得る能はずと想像する者あるに至る今や此の弊習を一變するに非れば如何なる妙論卓說の世に出るとも決て女子の地位を高尙にすると能はずと信ず余が言太だ短急にして圓滑ならず或は意旨洞徹せずして却て弊害をも生ずるなきを保つ能はずと雖も今や姉妹に望む處のものは姉妹は尊むべきを尊み賤むべきを賤み怒るべきを怒り喜ぶべきを喜び玉ふ處の氣節凜乎たる溫和柔順の姉妹たるを世に示し玉はんと是れのみ然らざれば婦人歎の三字は千歲の後倘痕を絕つ能はざるを奈何せん

Oh! too convincing—dangerously dear,
In woman's eye, the unanswerable tear!
That weapon of her weakness she can wield
To save, subdue—at once her spear and shield.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●叢話

○和學講義　第三回　歌の事

鈴木弘恭述

本回は貴嬢等に歌の事を話すべし。さて此の歌を詠む事を和歌を詠むといひ。たゞ歌といふべき所をも。必ず和歌といふは非なり。和歌は詩に對していふ時に和歌といふ例にて。つねに和歌といふには及ばず。歌とのみいふべきとあり。古今集の序にやまとうたは云云とあるも。詩に對していはれたるなり。

さて此の歌は。誰にても詠み得らるゝものにて甚容易なり。然るを極めて難きものゝやうに思ふはわろし。此の歌を難きものとなしたるは。後世に至りて一つの技藝の如く見做して。巧みなる言葉を撰へ。面白き趣向を取り込みて。虚飾を旨とする事の流行するやうになりての事なり。故に後世は唯心に思ふことを一と通り述べたりとて。歌の數には入らぬやうに爲りたるなり。是れ却て歌の本意に非るなり。古人の歌は決て然らず。則ち古今集以上の歌を見るべし。たゞ正直に我が意を述べたる歌ばかりにて。決て種々の物を取り込みて巧める歌はあることなし。其の證は後に古歌を擧て示すべし。余がいま歌は甚容易なりといふは。則ち是を指していふなり然る故に女童にても能く詠むことを得べし。否女童のみにはあらず。心あるものは皆詠出るに何の難きこともなかるべし。貫之朝臣が。やまとうたは人の心をたねとしてよろづのことの葉とぞなれりける。といはれたるが如く。おのが心からいろいろさまざまによみ出らるゝ物なればなり。其譯は如何といふに。此の三十一文字の歌は。本邦に固有したる言の葉にて。漢學や洋學の如く外國より傳來したるものに非れば。本邦の人は離れにてもよく詠みいでらるゝべき道理なり。否道理といふまでもなく。現在吾人の平常に口に云ふ所は悉く歌なり。是を優調に文字を三十一文字となして。よく味はひていふときは。上下貴賤男女老少の差別なく。苟も口あるものは皆歌を詠むことを得べし。歌は五七五七七と三十一字を綴ることにて。上の五七五の三句を上の句といひ。下の七七の二句を下の句といふ。此の上下五句を合せて一首の歌といふなり。然して是れは綴字法などいふむづかしき法則などのありて綴るには非ず。今吾人の平常に口にいふ詞は。多くは自然に五七言に組立て都合よく出來てある詞なり。貴嬢等よく考へて見玉へや。余がいふ所はこれ經言に非るなり。試みにいはゞ。

あなたたち(五言)よくかんがへて(七言)みたまへや(五言)

わがいふところは（八言）これしひごとに（七言）あらざるなり（六言）

是れいま余がいひし詞なれども。能く算へて見べし。これは六句なれども。此のうち一句を取り除けて五句となさば。やはり一首の歌なり。かやうのともをりをりはあることなり。貫之ぬしのかかれたる土佐日記の詞の中にも。舟頭のいへる詞に。御舟より仰せ給ふなり。朝北風の出こぬ先きに綱手はや引け。と舟子どもに命令したるを。舟中の人がきゝて。歌のやうにも有るかなとて。笑へることあり。これも五句三十一文字なればなり。即ち左の如し。

みふねより（五言）おほせたぶなり（七言）あさきたの（五言）いでこぬさきに（七言）つなてはやひけ（七言）

此の土佐日記のは。三十一文字なれども。おのれがいひし詞には八言が一句あり。六言が一句ありて。三十三字なれば如何にぞと。貴孃等不審に思ひ玉ふべし。これ聊も指支なき例なり。今その證をいはゞ。山邊赤人の歌に。

たごのうらに（六言）うちいでゝみれば（八言）しろたへの（五言）ふじのたかねに（七言）ゆきはふりつゝ（七言）

是らの例なり。此の歌も八言一句六言一句ありて。三十三字なり。此の他三十四字も三十五も六字も七字もありしと覺えたり。今忘れたれば後に證歌を示すべし。然れども初學のうちは注意して。なるべくは三十一文字によむべし。若し文字が餘りても三十二三字を限りとすべきとなりさて如何なるわけにて文字の多くありても指支なきやといふに。凡五十音の中に。あ行の一音あいうえおの五字は則ち母音にて。他の四十五字は皆悉くその音を長く引く時は。母音の響あり。假令ば

かァ　きィ　くゥ　けェ　こォ　　さァ　しィ　すゥ　せェ　そォ

たァ　ちィ　つゥ　てェ　とォ　　なァ　にィ　ぬゥ　ねェ　のォ

この例の如し。以下推て知るべし。故にあいうえおの五言は。文字餘りても聊も指支なきことなり。古人の歌の中にも文字の餘れる歌多くあれども。必ずあいうえおの中の文字あり。今試に貴孃等の能く知りたる歌四五首を擧て示すべし。

天智天皇御製　　あの字餘れる歌

あきのたの（五言）かりほのいほの（七言）とまをあらみ（六言）わがころもては（七言）つゆにぬれつゝ（七言）

小野小町　　いの字餘れる歌

はなのいろは（六言）うつりにけりな（七言）いたづらに（五言）わがみよにふる（七言）ながめせしまに（七言）

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

山邊赤人　うの字又いの字餘れる歌

たごのうらに（六言）うちいでゝみれバ（八言）しろたへの（五言）ふじのたかねに（七言）ゆきハふりつゝ（七言）

文屋康秀　是もいの字餘れる歌

ふくからに（五言）あきのくさきの（七言）しをるれは（五言）うべやまかぜを（七言）あらしといふらん（八言）

後鳥羽天皇御製　おの字餘れる歌

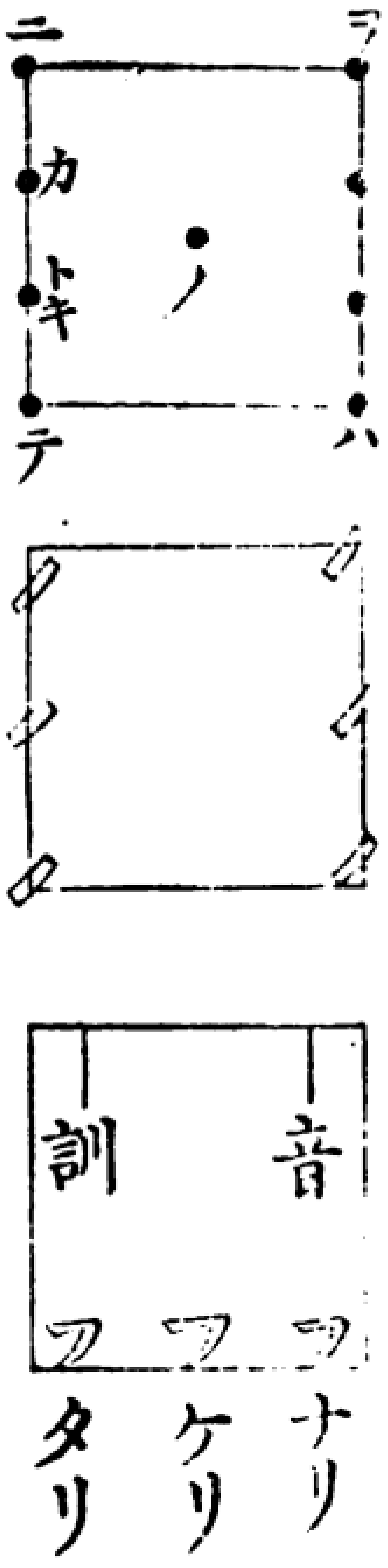
ひともをし（五言）ひともうらめし（七言）あぢきなく（五言）よをおもふゆゑに（八言）ものおもふみハ（七言）

今ふと思ひ出づるまゝにかきつくれば。これらあれども。古今集などを見もてゆかんには。此の例たくさんにあるべし。就て見出し玉へ。古今集の開卷第一にある。としのうちに春はきにけりひとゝせをこぞとやいはんことしとやいはんといふ歌の結句も八字にていの字餘れるあり。

又云。こんにちハ。よきてんきあり。あなたがた。まづうへのへでも。ゆきたまはぬか。と云へば。是も五七五七言あり。又云。たれさまハ。こんにちハ。がくかうへ。いかゞにや。などいふハ。皆五言の句なり。凡て是等の類にて。本邦の國風ハ。上古よりかくある國がらにて。自然に萬の詞が十中の七八は五言とか七言とかにいひなす事あるにや。實にあやしきまでにたゞしき規則ありけり。故えに本邦ハいにしへより言靈のさきはふ國などゝいひて。自から優れるあることなりけり。此の故えにおのれハ歌ハ甚容易なり。心あるものハ誰にても詠むことを得べしとハいへるなり。然れども詞に用格あり。又雅言俚言の別ありて。是を正しくせざれば。眞の歌とハいはれざることあり。然れども初學に向ひて。然るむづかしきことを說示すときハ。さてこそ甚容易からざる事なれと思ひて。歌よまんとしたる念慮も悉く消えうせてしまふべければ。余ハ貴孃等に此の事は漸々に敎へさとさんと思ふなり。然れどもまづその概略ハ告げ知らせ置くべし。雅言俚言の差別ハ過日示したるが如くなれば。（女學雜誌六十二號にあり）此所には省きつ。さて用格とハ。歌人社會などにて。てにをはと稱するもの是なり。今ハ辭の字を書きてテニヲハとよませたるハ。原より假借字なり。そもそもてにをはとハ。いろは四十七字のとをいろはと稱すと同意にて。實ハずむなんば。てつけりなむしぞ。らむべしめりましありばかりがにはたとあ。かなになりをとばかりが—にはた。ばども。ハもがのぞやかのこそ。などいふ詞を合せていへることにて。概していはゞ悉く皆動詞に屬するものな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り。然して又これを細別すれば。助動詞。指動詞。結動詞などもいふべし。志かるをいかなれば。てにをはとハ云ぞといふに。是れハふるくよりヲコト點と云ふものありしが。それより出たる名稱なり。今歌には用なけれども辭の名稱の話に付て。左に略圖を示す。多くハ筋などに圖の如く方形の筋を引き。その四方に幾つも點或はノ。或は|。或ハフ。などの印を付るなり



世に寛平法皇のヲコト點御筋の寫しあるものあり。此の圖とは少し異なり。然れども其の用ゐ方は同し。さて是は今の字書。四聲字林。或は正字通などに。文字の四方に平上去入の點を付すが如く。文字の廻りに上の如くさまざまの印を付し。その點に依りて何ヲ何コト何ト何ハ何ノ何ニ何カ何トキ何テなどよむ例なり。是れは論孟左國史漢老莊の類を讀むに。書によりて少しつゝ異る所あり。古へハ此樣に勞苦して漢字をよみたるなり。後世に至りては。俗に云ふ。送り假字といふものを付けたれば。讀むにいと便よくなれり。さててにをはとハいふも。此の四方の文字によりて稱し來れる名なりしを。假字用格の名とハなれるなり。

さて歌の事に付て猶云ふべきとあれども。本回は是れまでとす。後日古人の歌どもを掲げて悉く解きあかすべし。

● 佳傳

○忠貞不二秘錄　（第五）

言甲斐もなく豊浦に惶々手先につかわるゝ紙人形見る樣な者は幾人罪咎に落すも益なきとなれば先日吟味の時さえも一味の名をも言さぬ我を二た日や三そ日ほど暫時の露の命乞ひたとひ此世に置バとて今更ら何にを云ふ可きや然先刻歩卒もて不遠うち如何々々なれと父母にはさわり無き間安堵せよとの情言は明朝我が身が何事か云もやせんと過念して深切らしき機嫌とり甚も拙き振廻かな本より齒牙にかゝらぬ徒怨は無益そ快く死出の旅路を急かん者を月の穢のあればとて心の何ぞ穢可き南無日蓮大菩薩奥方さまと某侯の御間長く和睦御家繁昌御武運長久幷に父母弟の息災延命滿願成就南無妙法蓮華經と終宵心に念ずる數百篇冬の長夜も短くて無情を告る山寺に我は黄泉へ迎ゐ鐘曉告る頃なれバ若や無き後人の見て苦しき文も有んかと懐中物取出し開て見れは櫛鏡添るに紅と粉白の

是や日外吾妻にて宿下りせし其時に母が賜ゑる紅粉と思ひ出せはなつかしや母上樣と打ち伏て暫時涙に沈けるが思回して起上り悲歎に時刻後れなば人の笑を蒙らん嗚乎然なりと獨言いさや黄泉の門出に母が賜ゑる白粉もて心の垢も消めんと薄化粧して紅付けず髮掻付くる心の中哀れは此に推察れど筆拙なくして述がたく實女の錦心繡腸とは相逢のとも多かるべし折から門に迎の歩卒御尋の仔細わり疾出られよと促すに不二は靜に身拵へ死手の旅衣の可哀かくとは誰も白無垢に南無妙書きたる小袖きて黒繻子帯を引結水晶の珠數首にかけ出る容は更疑に屠所の羊に異ならず警固の歩卒に圍まれて既吟味所ゑ來にければ庭に幔幕打張せ中央に席を折舖て正面に三人有司わり左右に連立數多の歩卒嚴重にこそ扣たる中ゑ恐せる色もなく不二は警固に導れ既に其席に付きたるは哀れと云もれろかなり去程に有司某一通の凶狀を取出し讀聞せける趣は去る某の月某の日御奥某の間に於て側室豊浦と口論し設に深手を負せし處養生叶はず某の日死せり豊浦に惡事あるよし申共彼早己に死たれは虚實の程は知る可からず御場所柄をも辨へず人を殺害致せるは上を憚奉らず重罪至極の咎故に刎首に行べきを是迄多年奥方に召仕はれ候得ば格別の御慈悲もて士の法式に自害を仰付らると申渡して又云ふ樣從來今迄罪人の死骸は野山に捨れども其方をば是と共にせず宗旨の寺に葬る可し跡に願も有なば何まれ願候へと情めかして述にける不二は少しもわるびれず深き罪をば士の法式行れんことの其悦はいかはかり殊に死骸は禽獸の腹の肥に成んかと思の外の御仁政いと難有奉存此期になにも願わしき事いさら〳〵侍ねと厚き御意を辭も有憚我が名の不二の二字を以て法名石碑にくわへなば長く黄泉の悦ならん且慚愧事なれど月の穢の候得ば暫時ゆるしを蒙りて心靜に今一度清治たく侍なり此義を奉願と甚も哀れに聞ゆれば有司始終聞届け云るゝ仔細心得たり疾々用意と急がせば不二は悦び立ち起か歩む左右に付き添ふ歩卒厠の邊まで送りけり幾程もなく厠より出て手洗口そゝぎ本の席に來にけるに帯の脇より裾まて上衣の前を縫たるは月の穢れに兼てより糸針用意せしなるべし再び席に居直りて種々のこと願上憚り多く侍れとも料紙を貸し玉ゑと云に有司唯諾左右にかくと命すれば歩卒手早く取出し墨磨流し差出せば不二は靜に筆を染め一首の歌を詠じけり

　　信濃なる山路の雪ともろ共に春をも待たで消る今日哉

と甚も見事に書き終り尋常に坐をしむる時に一人の歩卒が紙

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に包める短刀三方に打載て前に置れは又一人股立高く襷がけ刀の鯉口くつろげて後の方に立ちにける頃しもさつと朝風の凄冷吹ろよぎ霏々と降かゝる席の上に雪もろとも今ろ消行く有様は恰三月の櫻花嵐に向ふ風情也此時一坐の諸有司は慈悲も愛情もわら男獄卒下奴に至る迄さすが人性至善の道理頻に洟うち拭もわり不覺に袖を沾もわるべし不二は再び會釋して三方前引寄せて見れば刀ハ竹篦なりこはそも如何にと打驚き我身女のことあれば自害しゑじと慢てかゝる振廻いたさるか承んと慍の面色三人の有司顔見合せ返す詞ゑあかりしハ吟味のときに聞恐し不格の答ゑ申しあば言責られんと過念なるべし後に立つたる介錯人心きゝたる者ありけん側より聲をかけ鳴於不二どの聞き玉ゑ縦自害のわればとて是非介錯を致すゆへ上にハ厚き思召短刀御身には心に叶ふ間鋪けれど今諸家の定法ありシカ心得て自害われ御用意よくば介錯せんと刀晃然と抜放てば不二ハ再び言はず眼をとぢて合掌し心に念ずる南無妙の未だ十篇ともあらざらん首ハ前にそ落けるハ哀れはかあきことゝもなり于時天保十年の霜月四日の朝とかや斯而死骸は城下ある宗旨の寺に葬て遺命に任せ法號に不二の兩字を加ゑけり悲哉此處女忠孝兼備比あき不二の大功わりあがら稱ハなくして慘刻ある刄に命を落せしハ享年二十二歳とぞ香骨は信濃に埋めども芳名一天に香ばしく我が日本にかくれなき富士の高根ともろともに千世万代の末へ迄ても雲の上より甚高し

一不二が法名一貞院不二妙松と稱し寺は日蓮宗にて某侯城下ある（昨日商人が申せし）長現寺と云り（大尾）

○左に掲ぐるは不二女の自筆と肖像とを圖に據りて寫し取

りたるものなり而て元圖ハ佐々木宮中顧問官が信州巡廻の砌に入手ありたるものをば同君の令孃加賀見繁子より吾人へ示されたるものなり倘ほ不二女の事に付て同子より聽得たる逸事其外は他日また更めて物すべし要するに吾人は讀者が同女の氣節を賞せらるゝとあらんを望むのみ

●寄書

○カートメル孃歸國に付米國傳道會社へ送りたる書狀のうつし（接第六十二號）（前號に之を東洋英和女學校より送りたる如く記したるは誤にて實は一百餘名の方々より出されたる也）

今我々が基督の前に跪き伏するに前後の差あるも此の如く幸ひなるものとありて共に榮を天に在ます神に歸すへしと雖も此忠且善なる主の婢の働らきは唯た神學の敎師にあらすして基督の愛の手本を其少しの間にも顯はしたる不思議なる働らきの力に依り或る者は愈々主を讃め或る者は新に十字架を負へり當時我々は相見て評して曰く基督の盡きさる泉より湧き出つる君（ミスカートメルフ指ス）が愛の涙は能く我々の剛愎なる心を溶解せりと蓋し此一事を以て君の働らきの中に甚た不思議なる力の伴ふを知悉すに足るへし君は此國に來り玉ひたる以來日本語を學ふとを勉め玉ひたれとも其實心神を他に勞し玉ふの故にや君平生の敏捷に比して其進歩著しとは云ひ難かりしと雖も君が優さしき顏ばせは能く意衷を知らしめ玉へり若し公平に評さは他に日本語を善くするの敎師に乏しからすと雖も其巧みなる言語は遠く君の沈默なる動作に及はすと云ふへし又其働らき榮へも必ず之に超ゆるならん是れ君が特有の德性たり英語の一句隻語をも解せさる老人君を一見して其至誠を悟り若き才識ある士女は君の美德風采を慕ふて止ます洵に君は婦女の鑑なり蝶裙を翻へし花釵を挿むの少女も君が影を戀はさるものなし君近頃に至ては學校の爲に僅かの勤めを取り玉ふまてにして重なるとは他の敎師の手に委ね玉へとも何の力の繫くにや近く學校に入りて親しく君の敎を受けさる者も君の歸國し玉ふ由を聞きたるときは長閑なる春の日も蕭然なる秋の夜の如く平生は物の道理を聞き分かぬ學び兒も宛も慈母を失ふ如き有樣なりき我々も君の歸國し玉ふ由を聞きたるときは心驚き胸悸ぎ肉親の永別も斯くまてには悲しく感ぜざりし暫く間は慟哭して頭をさへ容易くは擡け得ず半夜夢破れて殘燈の下に枕を沾ふす者は我々のみにあらさるへし我々中の或る者は君の此國に來り玉へるも肉躰の健からさるが爲に抄々しき働らきもなさで歸ることゝして痛く自ら思ひ煩ひ玉ふとの御心を推し量りて寧ろ神は君を此地上より召れ玉はゝ君の心も安かるべく我々も斯く何時までも思ひ續ぐるとはなかるへしと云へり實に至情より溢るゝ言と云ふへきか又或る者は父子と云ひ兄弟と云ふも何日まて共に此地上にあらんや我々も君と今別かれなは恐らくは再ひ此地に相見るの期なかるへしと雖も亦如何ともすへからすと云ひて昔し弟子等の耶蘇と永き別れを痛惜したるの夕べの事思ひ起し今は我々も警醒すへきの時なり左れは一旦君に別るゝの悲みは反て君の此國に來りて手づから植付け玉へる若苗を養ひ成すの眞手段とな

らんことを全能の主に願ふへし是れ君に答ふるの道なりと云ひて或は慰め或は勵ましたり我々は自已の職業に忙はしく暮す者の多けれは思ひなからも君に書を寄せ或は親しく安きを問ふことを怠りたりと雖も君と我々との間に存する親交は獨り祈りを聽く者之を知り玉ふへし恐らくは君自らも我々の心情斯くまでに切なりとは思ひ玉はさらんか君か我々を思ひ玉ふとの如何計り深きや亦我々も悉く知り得さるへし君の美德を賞讃するは唯だ我々の教會中に止まらす君の芳しき名は他教會にも其聞へ高かりけり

（未完）

●新報

○報知新聞　同新聞は十三日より十五日に至る三日間の紙上に於て男女交際を容易にするの方案を痛論せり之は元と近頃しきりに風聞する彼の大官某が某の宴席に於て某女に迫りたりと云ふ驚くべき風說に依りて殊更に男女交際の事を掛念したる親切の文章なり大意方今の景狀を以て云はゝ男女の交際をして成べく弊害を少からしむるには成へく之を禮を以て制限するの外致方なし故に亦た成べく禮を以て制し得べき種類の宴會を先にして此制限を施し難き樣の宴會を後にすべし即ち夜食會茶話會の類は當今の男女交際に適當したるものなれどもかの踏舞會の如きはさしあたり後にして今日に屢ばすべきものにあらずと云ふあり」此論吾人が尤も賛成して止まざる所なり但だ一事を加へたく思ふは禮式の事なり之よりして男女の交際に行はるべき禮式を吾國にて新工夫し折衷作せんなどと思ふは固より良策にあらず斯かる急激に製造したる禮式は人を制するの力なくして實際に無用なり又其能く習慣の勢力を得て人を制するに至るの日は一十年の內にあらじ故に當今の交際社會が突然として西洋の風俗を倣ひたると同時に亦急激に西洋の禮式を悉く遵奉するは至當の事と云ふべし故に吾人は此社會が嚴なる西洋禮式の下に其交際方を制せんことを切望するもの也

○國民の友　國民の友は其第三號に於て日本婦人論第一を論じ去十五日發兌の第四號に於て同論の第二を載せたり初は我國婦人が外界に於ては老婆の如く發達しながら內界に於ては穉女の如く未熟なる趣を叙して其器械的には驚くべき進歩を得て精神的に悲むべき野蠻を存するを歎し斯る婦人に對して束髮、洋服、會話、踏舞、的の教育を施し得たりとするは恰も是れ火を以て火を救ふが如しと云へり。故に後には之が眞正の教育は精神上の修養に在ることを論じて宗教的社會的政治的の修養の甚だ切要なる所以を說かる」叙事面白く文章斬新にして一讀甚だ愉快なる婦人論なり

○婦人矯風會の演説　前號に記し置たる二日間の同演説は何れも聽衆甚多くして隆んなるとありしが特に十三日の夜厚生館にて催したるには聽衆男女打混ぜ凡そ一千二三百名あり辨士の談論は皆非常の喝采を博したるが玆に一言せざる可らざるは聽衆の男子中に甚だ失敬なる言語を發するものありて臨席の婦人方に對し汗顔の思に堪へざりき當夜は萬事會員中の婦人方が自ら周旋盡力あり苟くも志あらんものは何も其精神に感奮して同情を表すべきに拘はらず折々に奇異なる言を發し失敬なる評語を辨士に加へて得意とする野蠻なる男子あり斯る者が尙ほ公會塲に滅せざるは慷歎の極と云ふべし

○妻の書狀開封の權　此權夫にありや否やと云へる問題を此頃或る討論會にて提出したり之は前年米國にても激しき議論ありて遂に之を否决したるが佛國にては之を可としたるもの多かりし特にチュブスと云へる新聞が諸の有名なる人の説を請ひ集めたる中にはアダム夫人及びプレッセンス氏の如きは之を不可としたるにかのアレキサンダーヂウマの如きは不思議にも之を可としたり吾人は固より斯る疑問の發するとをだも好まず若し開封の權の有無を問はんには固より夫が妻に對する時にのみ限らず妻が夫の狀を開封するの權ありや否やをも問ふべき者と云ふべし

○皇后の恩典　獨逸國皇后陛下は婦人の勤勉良行者を奬勵するの目的を以て凡そ全國の婦人中他人の家に雇婢となり使役せらるゝ者にして四十年以上一家に勤續し其品行上瑕瑾なき者には金製の十字架賞牌及び皇后の親しく署名せられたる褒狀を下賜すべき恩典を定め去る千八百七十七年一月一日以降之を施行したりしが爾來滿十年間即ち昨年の十二月三十一日迄に該賞牌を授與せられたる者都合千三百六十三人に上れり而して就中勤行無比の者には若干の年金を下賜せらるゝ事に付き近頃其詮議中なりと云ふ（本年五月十三日官報）

○大鳥氏の演説　華族女學校長大鳥氏は去十三日同校の生徒一同を集めて彼の洋服に改めたる規則の主意を演説ありたる由に承はるが其要之よりして躰操を盛んにするにつきては從來の和服にては不便勘らざるに付て之を改ることゝはなせどもかのコーセットを以て腰を蜂の如くする類は固く之を禁ず既に其筋の仕立屋に命じて成べく之を緩にすべきやう言付たれども更めて注意し置く云々の事ありしよし此校の女生徒等よりして淡泊の洋服を着くるの習慣を造り出さば其効能眞に多かるべしと思はる

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

○女子洋服裁縫練習會　同會は此程日本橋區蠣売町二丁目十四番地にて開會せり敎師は先に歐洲にて重に婦人服の裁縫を研究せし加藤鶴吉氏にて生徒は毎月五十錢宛會費として預置き一ヶ年にて卒業する代りには卒業の上は一ヶ年間本會に從事して相當の給料を受くべし又事故なくして卒業したる者へは毎月預り置きたる會費は返附する筈なりと云ふ

○女紅塲廢止　三重縣地方にては藝娼妓を敎育するため女紅塲を設立する事流行の傾きあるにも係らず北海道にては函館蓬萊町、同臺町、根室等の女紅塲は此程廢止されたり

○公賣淫再興の議　此程木挽町の厚生館に於て開きし日本基督敎徒同盟會にては公賣淫廢禁の儀を日本政府に建議する事に決し又公賣淫廢止の論は屢々本紙に記載し來り且我警視廳は曩頃三業取締規則に大に改正を加へし等追々世の風潮は廢禁の說に赴くに拘はらず唯り和歌山縣にては娼妓公許を可とするの說勝を制し前年來嘖々止まざりしが近頃其說も漸く立消の姿となりしに今や又公許說再燃の勢ひありと又岐阜縣にても是迄公許論は屢々縣會の議題となり已に昨年の如きは滿塲の一致を以て之を可決せしが小崎縣知事は鋭意之を拒み遂に之が公許を許さゞりし然るに今年の縣會にも此說を提出せんと思ひ居る議員もありと聞けり嗚呼

○夏服と束髮　女の夏服は阿波縮が最も廉價にて且着工合も輕くして宜しきとの評判より同品の注文は昨今非常に多く縞柄により差異あるも先づ一組レース付八圓五十錢レースなし七圓五十錢以下六圓五十錢位なりと又束髮用の小間物類は賣口活潑と云ふにはあらざれども昨今頻りに買流行の傾きあり品に依りては小賣店にて客先へ一箇二箇づゝ賣捌く價より何ダースといふ賣口の方却て一割乃至一割五六分方も上直に取引するものありて爲に其荷の捌口に困却し居る小間物屋もある由これは束髮の流行に連れ近頃親規開店の小間物屋が元方にて競買する者多きためなりと云ふ

○藝娼妓の英學　東京にては吉原の吉次を始め新橋、柳橋は勿論牛込の藝妓に至るまで英語を學ぶ由聞及びたるが追々地方まで傳染せしものと見え仙臺、山形、名古屋、豐橋等の藝妓にもチラホラと此流行に感奮し殊に大坂南地五花街の如きは取締人と役員と相談の上同所の女紅塲にて各席の藝娼妓に英學を學ばせんとの事に決し或る英語敎師を招聘して此程より稽古を始め六百三十餘名の藝娼妓がＡＢＣと頻りに勉强し居ると云ふ斯る賤業の者までも卿語の聲を發するに至りしは兎

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に角文明の餘澤と云つべきか

○女子奬藝會　德島高等女學校にては來る廿九日より第八回の奬藝會を開く由にて當日は午前九時より開場式を執行し式終りて午後四時迄縱覽を許し翌三十日は午前八時開場午後四時閉場三十一日は午前八時開場し午後三時閉場式を執行する筈ありと又右に付出品すべき筆跡は來る二十日(今日)同校へ登校して揮毫し其他の出品物は同日迄に差出すよし同地よりの通信

○埼玉縣婦人會　同會は埼玉縣北埼玉郡手子林村聯合戸長岡戸文右衛門氏の主唱にて女德を養生する目的より此程同村廣瀨學校にて其第一會を催し婦人に切要なる種々の演說等ありしが婦人の來會者は凡そ六七十名ありしと

○紋鼈婦人會　北海道膽振の紋鼈村には此頃婦人會を開き當月の四日に其の第一回を催して橋本美知氏の祈禱、小山田正夫、橋本美知、其母廣惠等諸氏の演說あり此會は爾后月々一回ヅヽ開くべき事會費は會員自ら造り出す事（老婦人は針仕事を爲すか又は人の子を護りて一二日遊ばせ其賃を得てだも自ら之を造らんとの決心なり）等を定め尚は橋本廣惠女を幹事に推撰したりと云ふ熊多しと云ふ北海の果にも尙ほ淑雅たる婦人の集會あり女學の進歩感謝するに余ありと云ふべし

○歐洲の酒況　（接于第六十號）　和蘭にては飮酒の風を減ずべき爲に度々發令などあれば酒屋の數年々に減じ千八百八十一年には總計四万五千軒あり恰も人民八十人に付一軒の割ありしが千八百八十五年に至ては既に三万一千軒に減じ百十二人に付一軒の割合となれり但し法律によれば都府にては五百人に付一軒田舍にては二百五十人に付一軒の酒屋を置くを許し其上に越すとを禁ぜり又齡十六歲以下の人若くはすでに醉酊せる者に酒を賣るとを禁ぜり而して此に至らせたるは多く禁酒會員の盡力によると云ふ。佛蘭西特に都のパリにては異に驚くべき程に酒風烈しくなれり然れどもアダレー孃婦人禁酒會の爲に非常に盡力ありて既に万國聯合の仲間にも入りたれば遠からず其働の結果を見に至らん。日耳曼及びスヰッルランドにては政府に於ても甚だ酒害の事に掛念あり種々飮酒の風を止むるに盡力ある最中なり特にスヰッルランドにては色々の禁酒會ありて大に力を盡す中にも綠十字會尤も勢力あり。スエーデン、ノルエー、デュマーク等は何れも飮酒の風隆んなる所なりしに近來は此風大に改りたりこれ一には法令の力により二には色々の禁酒會ありたるに因る云々

●日本婦人授産策答文　（接于前號）

而して斯かる婦人ハ裁縫割烹を以て百年の壽命を保ち得べしと信ずる平然る能ハざるを以て孔子の女ハ家に在りて父に從ひ嫁して夫に從ひ夫死して子に從ふの格言を確信したり故に其依頼する所の夫死して其子猶ほ幼なるときハ此場合に當りて唯だ號呼狼狽するのみ素より商業に任ぜしことなきを以て胸中遺憾ながら廢業せざる可らず種々憂思の間に其故夫の辛苦經營せし所の家產を倒盡し去りて終にハ家族分散して兄弟の親を以て終天相見るを得ざるに至りて極まる矣諺に曰ハずや大厦の倒るゝ一木の能く支ふる所に非ずと況んや裁縫割烹以てこれを拯ふに足んや又た言はずや長者三代と實に人生の浮沈ハ測られざる者にて屈指の富家と云ハれたる中にも其子に敎ふるの誡ハ吝嗇に非ざれバ手代を使役する勿れと云ふ而して猶ほ過慮して思へらく彼れ吾死するの後其富資を以て之れを妓樓に投せバ吾勞苦遂に空しからんと乃ち爲に纔か裁縫割烹に通曉する一美人を聘すと雖ども其子ハ吝嗇の極產資を投じて大利を得るの時に際しながら奮つて之を爲す能はず又た手代を使役せざるを以て其器局偏小にして一生を終り其子に至りて祖父の卑怯を笑ひ大金を投じて手代を使役すと雖も肝要なる商業の熟練を遺傳せられざるが故に其手代が盡く其家を蠹するの賊となり長者三代の稱虛言ならざるに終る矣然らバ則ち男子の婦を娶るハ容色を擇びて敢て才能の高下を論ぜざるは婦人をして只だ裝飾を之れ務め從つて實業に疎からしむるに就て責を分たざる可からざるなり此等の慣習より父母其人が女子を敎訓するを見るよ其女子か小學校より歸るの後ハ務めて飾裝を爲すを敎へ爲に美衣裳を製し又師に往て三味線を習はしめ既に學校を卒業するや曰く裁縫割烹を敎ふればバ以一個の婦人たるに足ると敢て高尙なる敎育を受けしむるを欲せざるが如し斯の如き妄說を排拆して眞正なる女子の體面を造り出すには如何なる實理に就くべきかハ考察を要する所也今余輩の見る所を以てするに大約左の點に於けるか如し

（一）女子をして盡く自ら生活するを得る職業を爲さしめバ從前の如く壓制なる男子に屈從するの必要もなく亦た離緣せられたりとて號泣悲哀するにも及ばず而して男子をして漸やく溫和中順の人となり女子の相談相手とならしむるを得べし

（二）女子にして進んで男子の商業を協辨せバ男子ハ計貨記簿等を女子に委任し其れに費やせし時間を他の事業に轉入して商業を盛大ならしむるを得べく又女子が家業の盛衰に切なるの志念を生じて是れハ改めざる可らずと思考する事柄ハ之れを男子に忠告するに猶豫せざる可く男子も亦猛省する所あらん且つ病氣が男子の上に見舞來りて急遽に死を遂ぐることあるも女子ハこれが爲めに狼狽措く所を失ふにも及バざる可く其夫たる男子に代りて家事を幹むるに差支へ少しとなさん

（三）女子にして能く家事を幹むるに堪る時ハ從つて其使役する所の雇人の能力及び信詐を鑒定するの見識を得べく其經驗を積むこと日に多きに從ふて危險の念を減少し且つ諸國に出店を設けて商業を盛大にするにハ雇人を使役せざる可らざること勿論なれバ此場合に際して會計を董督し記簿を

嚴正し及び雇人の忠邪を甄別し得るの見識を養はざる可らずこれを養ふは女子の家事を幹むるに堪ゆるにあり

(四)女子をして女權を伸張せんと欲せば邦國の開明を促すに就て男子と倶に協力し及び實際百般の事務に當るに非ざれば得可からざるを知らしむるに非ざれば妄りに男女同權の說を浮信して男子の權力を分つを吝むと思ひ後來よ望を屬すべき兒女の敎育を不必切にする如きあらば實に由々敷次第あらずや

(五)男女同權とは男女平等に義務を爲すより生ずる者あり今日の婦女子何を以て男子と平等の義務を盡したるを認め能ふや男子と家事を協辨するや自ら生活し能ふや自ら進んで國事に盡力し能ふや能く此疑にして解けたらば男子より其權を分つに猶豫す可らず

嗚呼世の男女同權を說く者概ね空理に馳するが如し女子をして此等の義務を踏まず而して徒らに其權力を男子と同等あらしむることあらしめば其權力は法律上に顯はれたる空權のみ何を以て男子の實權と並び立つを得んや若し此に至らば其法律は一篇の紙片にして白紙と何の異あることあらんや

抑も世の婦女子が眞に男女同權を實行せられんことを欲せば當さに自から務む可きの義務を務め男子に利する所あらしめて夫婦相互の交情を圓滑あらしめざる可らず又た自から生活し得るの境遇に達して男子の耳目を聳動せしむることに盡力せざる可らず女子にして自から務む可きの義務を務め自か生活し得るの境遇に達せば平和の手段を以て其望みを達し得べきは予の信する所あり何とあれば女子盡く自ら生活し得るの身分とあらば從前の如く男子の扶給を仰くの必要もなく從つて其夫と擇ぶべき男子を求むるに自由あるのみあらず男子に在りては從前の如く其妻を打擲罵詈せば彼れ自ら進んて離緣を要求するに猶豫せざる可きを知り且つ職業に熟練ある婦人を得て妻と爲さば巳れに益する所甚だ多きが故に彼我の關係益々親密にして之れと同時に壓制酷薄の弊習は氷解霧散し從つて女子の權利充分に振張せらるべきなり

以上論究したる所を以てするときは女子にして自から務む可きの義務を踏まば女權を伸張するに於て辨舌利口の能く致す能はざる所を仕遂げ得んこと敢て疑を容れざるが如し自から務む可きの義務は何ぞや男子と家業を分擔するに在り其自ら生活するは職業を勤むるに在るを以て下節にかてこれを攷究すべし

第二節　婦人の職業を論ず

愛國心ある諸君子は方今我國に現在せる數多の娼樓を見て如何の感を惹起せらるゝか其實に憐れむ可きの狀態あるにもせよ其職業が賤しむ可きの限りなれば夙に識者の醜とする所あるは言ふを待たず現に支那朝鮮に至りて醜業を營みし所の婦女子は我が政府の體面に關すること少からざるを以て公使館より員を派して此等の婦女子を逐歸されしにあらずや又た顧みて娼妓の有樣を見るに其中には富祐家の娘子も其父母が世を去りて兄弟ある家主が盡く其家產を浪費して進退度を失ふの悲境に陷り爲めに昨日まで深殿に養はれて春秋花月を弄するの餘り歩々金蓮を生するの心地せらるゝよと富祐の地位に誇りしも一朝の激涙に眠りを破られて是ぞと云ふ渡世の職業

に習ハされバ恥ちらはしくも浮薄男子の爲めに其顏色を弄せらるゝ醜業に陷らざるを得ず殊に近來士族の姉妹が多く娼樓に身を沈むるに至るを見て爲めに悲痛の念を起さゞる能ハざるなり是等の一部分ハ近來不景氣に破産して斯かる有樣に陷りしかハ知らずと雖も兎角婦女子が確とした職業なきを以て此に至ると思考するも敢て空言にもあらざる歟

余輩嘗て婦女子嫁入の時携ふ所の書物を見るに手島堵菴著す所の女前訓躾種に曰く一度嫁して後ハ夫を神とも佛とも賴み貴び敬ひ此夫に見離されてハ身の置く所なしと思ひ入り夫と同體の心となりて假令バ手足目口の用事を缺くことなきが如く少しも怠りなく仕へ奉る可し又た曰く女の業ハ巧なると人に絶れよと云ふにハ非ず常に織縫の業に怠らず客人などあれば食物など潔よくして馳走するの類之れなり而して女の職業を論ずる所に云へるあり女の業ハ手習紡績糸繰綿摘裁物織縫料理煮燒加減大概此の如し右の手藝不調法なるハ女の大恥なり勵みて覺へ仕習ふべし此外の遊藝ハ下々の身ハ知らぬ方が却て賴母敷ものなり貝原篤信著す所の女大學に曰く女ハ常に心遣ひして其身を堅く謹しみ護るべし朝ハ早く起夜ハ遲く寢ね晝ハ寢ねずして家内の事に心を用ひ織縫績緝怠る可らず亦た茶酒など多く呑べからず歌舞妓小歌淨瑠璃などの淫事を見聽くべからず宮寺など都て人の多く集まる處へ四十歳より内ハ餘りに行くべからず又た曰く女ハ陰性なり陰ハ夜にて暗し故に女ハ男に比するに愚にして目前なる當然の事をも知らず此等の書物皆男子に制定せられて而して之れを購需して其娘子の學習に備へ娘子ハ亦た此書を其子に傳へて此等書物の主意世々の婦女子の心胸に浸潤したり見よ世の婦女子（他鄕ハ知らず）嫁入の時に此等書物を寶箱と稱して持參し其他ハ習字手本の如きのみ夫れ此の如く婦人の職業を裁縫割烹に止めたるのみならず又た實際其夫を神佛と等しからしめんとせり然らハ即ち日本の婦人をして依賴心甚だ熾んに時ありて不測の禍害目前に橫ハるを悟らしめざるハ此等諸先生の御盡力に依る乎嗚呼日本婦人ハ斯の如き女訓に束縛せられて嘗て脫出することを知らず豈に悲しむ可きの限にあらずや余ハ亦た手島貝原の二大儒が時世男を尊び女を卑むに眩目して斯の説を爲したるを惜むなり何を以て時世男を尊び女を卑むと云ふや二大儒の生時實に封建時代にして男子の武力を以て造り出せる世界なれば女子ハ武人の資格に適せずして創業の功に預らざるが故に終に此弊習を釀出し而して封建主義ハ明治維新の間に消滅し爾來僅々十數年を經過せるのみなれハ女子の思想猶ほ舊時の如くなるも少しく恕す可き所あるが如しと雖ども日本男子が長足の進歩に比して倶に並行する能ざるハ遺憾とすべき所なりとす

毎日新聞記者嘗て女權擴張の説を爲して婦人の職業に論及し云へるあり倩々日本婦人の爲す所を見るに其人員ハ男子に伯仲する程に多數なれどもこれぞ婦女の職業なりと云ふ者あるを聞かず彼の裏巷僻街に在る洗濯營業を以て之を婦女の業なりと云ハん乎洗濯營業の如きハ殆んど一種の專業と云ふ可からざる者にて貧賤なる婦女頭將さに半白ならんとし出てゝ人の妻たらんとするも世に需用者なく左りとて身に一藝のあるにあらざれバ僅に他人の衣を濯て其日の生活を爲すものなり

寒鄕僻地の婦女ハ粗末なる木綿其他の織物を爲して農間の業とすれども東京其他繁華都城の婦女に至りては身に覺へたる藝とてハ一もなく幼より父母の敎育宜しからざるが故に僅かに坊間に行はるゝ鄙野なる音曲を爲すとを知ると雖ども未熟にてハ固より一身樹立の助けとなる可き業にあらざるなり洗濯營業の外婦女が營む業と云ふ可きハ女髮結と音曲の師匠と產婆營業の三あるのみ產婆の業は醫術の一部なれば素より人間必須の營業なれども需用に限りある者なれば之を營むに多人數を要せざるなり其他女髮結音曲師匠に至りてハ少しく思慮ある者は之を營むを羞て爲さゞる者にて之を彼の漂母の業に比するに外貌こそ硏醜の差あれども品位に至りてハ漂母の業却て彼二業の上にありとの世評ある者なり又た曰く日本下等の婦女ハ醜體ながらにも數百里の波濤を越へて海外に行く氣象ある者あり其業を云はゞ實に醜體の限あれども其氣象を云はゞ支那朝鮮の婦女が僅に戶外に出つれば他邦異域の感を爲す如き卑怯の者にあらず之れに敎ゆるに相當の法を以てし之れに授くるに至當の業を以てせば彼等ハ男子に劣らざる能力を顯はすとならん然れども彼等開國以來男子の下に壓せられて自分の身體精神すらも自分の所有とするを得ざるが如き有樣にて今日迄傳來し來たるなれば遽かに之れに萬般の業を授くるも彼等其任に任ふる能はざるともある可き歟故に余輩ハ差當り左の業を以て婦女職業の範圍內に皈せんと欲するなり卽小學敎授電信技術郵便信書取扱事務各種病院看病の事務活版職筆製造木綿織物絹織物レース製造等是なり此內木綿及絹織物等は今日最早婦女職業の範圍內にあることゝならんなれども其他の業ハ尙は男子の占領する所となれり明治十四年十二月の調查に依るに全國諸種の學校を合せ其數三万餘校にして敎員の合計八万二千二百十三人此中公私小學の數二万八千九百〇八校にして其敎員男女を合せ七万六千九百六十九人なり此中婦女にして敎員の職を奉ずる者二千四百九十六人なれば小學敎員七万餘人ハ男子尙は其職に當れり今之を婦女職業の範圍內に入れ學校にして新に敎員を要する時ハ成る可く婦女にして合格の人を求め漸次小學敎員には男子を減ずるの法を施さば數年を出ずして全國二万八千餘の公私小學敎授は皆婦女の掌る所とならん夫れ小學敎授の業たる敎育部內に在りて必要の部分を占むるに相違なしと雖ども其學藝の度最も低き者なり六才より十四才迄の童蒙に讀書算術等の數科を敎ふれば其他に格別の課業あるにあらず而して其敎課書ある者も一定の書籍ある者なれば普通の惱力を有し懇切の性を有する者ハ婦女と雖ども容易に其職に當るを得べし殊に童蒙を取扱ふには男子より女子の温柔丁寧なるに如かざるべし又費用の點より見るも男子を止めて女敎師とせば著しく費額を減ずるを得べし文部省第九年報に載する所を見るに全國小學の敎員給料ハ明治十三年に平均年八十四圓五十九錢にて翌十四年には平均八十六圓四十七錢餘に當るとあり今之を悉く女敎師とせば其費額ハ幾んど半額にも減ずるを得んと記者の說實に然り余敢て間然せず偖て婦人の職業を範圍して其範圍內の職業を獨占せしむるの可なるや否なるやハ余輩聊さか議する所なるなり(未完)

社告

女學書類取次

婦人地球週遊記(一冊)英國ブラッセー女著、内田彌八氏譯。定價七十錢。本誌第廿六號に批評あり。

日本之意匠及情交(一冊)山口卯吉君著。本誌第廿七號に批評あり。定價十五錢。郵税六錢。

賢女節身事蹟(三冊)今川應君著。本誌第廿八號に批評あり。定價三十六錢。郵税十二錢。

ひざもとの教(一冊)近藤眞樹女著。本誌第卅二號に批評す。定價十錢。郵税四錢。

いへのをしへ(一冊)松山高吉君著。本誌第卅四號に批評す。定價三錢。郵税二錢。

日本婚姻の弊害(一冊)大島盛三君著。本誌第卅五號に批評す定價十三錢五厘。郵税四錢。

看病の心得(一冊)笹川純一君著。第卅五號に批評す。定價三十錢。郵税六錢。

演劇改良論私考(一冊)外山正一君著。本誌第卅六號に批評す。定價二十錢。郵税四錢。

社會改良と耶蘇教との關係 同前著。本誌第卅九號に批評す。定價廿五錢。郵税六錢。

小兒健育示要(一冊)岩田文吉君著。本誌第卅六號に批評す。定價四十錢。郵税十錢。

女子必讀(一冊)進藤直温君著。本誌第卅七號に批評す。定價五十七錢。郵税十錢。

朗蘭夫人傳(一冊)坪内雄藏君譯。本誌第卅九號に批評す、定價六十錢。郵税十錢。

日本婚姻法論畧(一冊)鈴木券太郎君著。本誌第卅八號に批評す。定價五十五錢。郵税十錢。

日本婦人論(一冊)井上直女編。本誌第卅八號に批評あり。定價二十六錢。郵税六錢。

(右取次賣捌)

東京京橋區日吉町八番地

女學雜誌社

特別廣告

○東京婦人矯風會主意書

吾等婦人國家の弊風を矯正せんことを希ひて玆に東京婦人矯風會を設くる者は當今の時勢甚だ之を必要とするを信ずるがゆゑなり抑も今や千歳一遇の好機會に遭ひて女權伸張の氣運如此く熟したるの時に臨みては吾等が責任として力を盡すべき者太甚だ多し然れども大凡そ眞に事物の改進を圖らんに先づ從來の弊害を察して細に其由て來る所を窮め以て之を矯正するの覺悟あること最も大切ならん特に方今一向に西國の風習を羨み慕ひて細大の事悉く之に倣はんとするの時に當ては宜らざる外風も亦往々にして我國内に侵入することあり吾等今ゝに於て先づ之を刈り除かずば其弊を釀すとの大なるは他日亦更に今日を見るの歎あるべしと思はる故に吾等が此好機會に立つて當に然るべき所の義務を盡さんとには先づ從來及び新人の弊風を舉て一々其害の恐るべきを示し速に之を除いて以て良風俗を起すの地を作るに在りと信ず此故に我國一般に流行して特に吾等女性を苦むる所の諸の弊風は固より言を待たず吾等が敬愛する男子諸君の間に行はるゝ數多の弊風と雖も延て其害を吾等婦女子の上に及ぼすべき者は亦固より吾等が矯正せんことを欲するもの也之を以て男尊女卑の風俗及び法律を除き一夫一婦の制を主張し娼妾を全廢し家制交際の風を改め飲酒喫煙放蕩遊惰の惡習を刈るが如きは悉く皆な吾等が熱心に盡力せんことを希圖する所のもの也但だ事をなすは專らなるを要する者と信ずるが故に吾等事業の第一着手として先づ娼妾を全廢せんことを目的とし之が爲に會員惣躰拮据して盡力し遂に此事の成るを待つて更に第二の事業に移り一々歩を推して遂に吾國内の弊風を全く滅し去らんことを願ふ然れども此事たる素と高尚至難の業にして少數の人の能く爲すべきものにあらざれば吾等は世上同志の姉妹諸君及び誠實なる兄弟諸君に對して其の筆に口に力に凡ての事に於て賛成あらんことを切望して止まざるもの也

東京婦人矯風會 書記

女學雜誌社内 矯風會事務所

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

廣告

田口卯吉君結髮沿革附錄○和崎義路君校○巖本善治君跋
渡邊鼎君著

東髮案內

美製小本八十頁細圖入
定價十五錢郵稅四錢也

當今東髮流行の折柄其結び方不案內の婦人に適する東髮二十餘種の結び方を丁寧に敎へ一々細圖を附して親切に案內すれば何如なる僻遠の地に在りて東髮の風を知らざる人々も之に依て容易に自ら試るを得べし特に田口卯吉君の論文東髮會の規則其外をも添へたれば結髮改良に志ある人々は宜く一讀あるべし

○但し本社出版の書籍は定價より一錢も割引不致候事

東京新橋日吉町八番地
女學雜誌社

教科書專賣所廣告

田中登作閱　敎育書專賣所普及舍編述
○**敎育心理論理術語詳解**　全一冊　定價金六十錢

山縣悌三郞譯補　ペインター氏原著杉浦重剛譯
○**理科仙鄉** 自第一至第六　既刻全十冊　定價金二十錢宛

文學士井上圓了著
○**敎育全史**　全五冊　二ノ卷出版　定價二十五錢宛

○**倫理通論**　全二冊　二ノ卷出版　定價金二十五錢宛

大賣捌
大坂備後町一丁目　梅原龜七
仝　心齋橋通リ　前川善兵衛
仝　北久太郞町四丁目　柳原喜兵衛
仝　本町四丁目　岡島眞七

教科書發兌元　東京下谷區練塀町十四番地　**普及舍**

發兌	
四月。	二日　九日　十六日　廿三日　三十日
五月。	七日　十四日　廿一日　廿八日
六月。	四日　十一日　十八日　廿五日
七月。	二日　九日　十六日　廿三日　三十日

定價		
一册。五錢	郵稅。一錢	(但府內無郵稅)
十册。四十八錢	郵稅。十錢	(同前)
半年分	一圓十七錢	府外は一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は二圓八十六錢

廣告

一行　一回　(廿七字詰)　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學に關係ある書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を揭する時に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂○東京芝西久保櫻川町萬春堂○東京神田區雉子町聞々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本鄉區元富士町盛春堂○同本鄉區春木町二丁目解明堂　東京本鄉四丁目文壽堂○橫濱仲吉町角田屋貞○京都四條通小橋へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンポード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西內大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○勢州松坂家里初枝

發行所
東京京橋區日吉町八番地
本局　**女學雜誌社**
持主兼編輯　巖本善治
印刷　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."
Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku-Zasshi Office, No. 8 Hiyoshichō, Shinbashi, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY